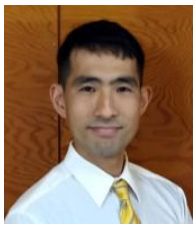
合同 No.４８１

「じゃあどうしたらいいの」



屋代教会牧師
石坂和久

「イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。』そして、起き上がって風と湖とをお叱りになると、すっかり凪になった」（マタイによる福音書８章２６節）。

イエスさまの言葉に従い、弟子たちは共に船に乗り出航しました。しかしそこに嵐が起きます。これまで多くの人が、この船に乗るという行為をイエスさまの弟子として歩むという決意の表れとして受け取ってきました。洗礼を受け救われるということは、イエスさまの弟子になることを意味し、それは言ってみればイエスさまと同じ船に乗るということです。しかし、そこで嵐が起きたのです。ここでひとつのことが明らかになります。それは“信仰を持てばすべてが順風満帆にいく”わけではないということです。多くの人が神を信じることによって期待することは、自分の人生に嵐が起きなくなることではないでしょうか。しかしイエス・キリストを信じても嵐が起こるのです。いやむしろ、信じるからこそ、イエスさまに従うからこその嵐がある。

なぜイエスさまに従うことで嵐が起こるのか。それは、この世とみ言葉の間にズレがあるからと言えるでしょう。そのような中でみ言葉に従うことを貫こうとするとき、摩擦が起こります。そしてその摩擦は、わたしたちの周囲に波を起こすことになる。また様々なみ言葉がわたしたちに問いかけてきます。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣いているか、敵を愛しているか・・・問われるたびに、できていない自分を思い知らされます。そんな問いかけ一つ一つもまた、わたしたちの心に波を起こします。イエス・キリストに出会ってさえいなければ、み言葉さえ知らなければ、この葛藤もなかったはずなのです。イエス・キリストに従おうとするからこその嵐があるのです。

嵐の中で弟子たちはイエスさまを探しました。彼らはこの荒れ狂う船内で寝ているイエスさまを見つけ、起こします。イエスさまは起き上がり風と湖とをお叱りになりました。すると、あれほど荒れ狂っていた湖が静まったのです。しかしこのとき、イエスさまは弟子たちを叱られました（２６節）。ではこのシチュエーションの中で、どうすればイエスさまから叱られずにすんだのでしょうか。わたしたちの人生にも嵐は起こります。そのたびに、わたしたちは助けを祈り求めてきました。嵐で沈みそうになる船の中でイエスさまに助けを求めた弟子たちの姿は、わたしたちの姿でもあります。しかしそんなわたしたちをイエスさまは叱られるのです。「じゃあどうしたらいいの」そうつぶやきたくもなります。ある先生は説教の中で、このときの弟子たちの正解は、イエスさまと一緒に眠ることだったかもしれないと語っておられました。嵐の中イエスさなと共に眠る、それほどまでにイエスさまに信頼する、それが一つの正解の姿だったのではないかと。

嵐の中、その恐れ、不安から逃れたくて助けを祈り求める。それがわたしたちの実際です。しかし慰めであるのは、そんな信仰の薄い者の叫びであっても、イエスさまはその身を起こし、助けてくださるということです。イエスさまと同じ船に乗るということは、イエスさまは隣におられるということです。船に乗ったのですから信仰はあるのです。薄いだけで、なくはないのです。信仰があるから、イエスさまに助けを求めます。そんなわたしたちの叫びを、イエスさまはかならず聞き、応えてくださいます。そしてこの経験が、わたしたちの薄い信仰を少し厚くするのです。

この出来事を通して弟子たちは、イエスさまが風や湖さえも従える方であることを知りました。ということは、また同じような状況に陥ったとしても、イエスさまが共におられるならば大丈夫という確信が積み重ねられたということです。同じ状況になれば、またイエスさまに助けを求めることでしょう。しかしその状況に対する恐れは、今回よりも確実に減っているはずです。イエスさまと共に嵐を超えていく経験をすればするほどに、わたしたちの恐れは消えていきます。そうやって信仰が厚くされていく先に、ついには、イエスさまと共に船の中で寝るということも可能になるのかもしれません。救われても嵐はなくなりません。いやむしろ信じるからこその嵐があります。でも大丈夫です。わたしたちはイエス・キリストと同じ船に乗っているのですから。